

照国開拓団の終焉

神奈川県 畑山 秀雄

はじめに

あの満州における照国開拓団の実態、そして終戦から引揚げまでの惨状、開拓団の終焉から戦後の歩みについて書き残すこととした。かつて共に血と汗を流した友はほとんど亡くなってしまったが、生き残った者の務めとして、あのような惨禍が二度と起きないことを念じるものである。

一 満州開拓青少年義勇軍に入隊

私は六人兄弟の五男で、父は役場の職員だったが、昭和十三（一九三八）年に亡くなってしまった。長兄は、その一年前に勤務先の福島県庁から満州拓殖公社に出向し、渡満していた。軍務に服していた次兄も、昭和十四年に満州で除隊しそのまま軍属となり、さらに四番目の兄は、相馬農蚕学校を卒業すると満鉄に就職した。結局、地元の

役場に勤めた三番目の兄と私だけが郷里に残る結果となった。私は高等小学校を卒業後、同級生五人と一緒に群馬県の中島飛行機製作所に就職、仕上部門の見習工になったが、当時は軍需景気で仕事は忙しかったが、待遇は良かった。

昭和十五年のお盆休みに家に帰ると、長兄も休暇で帰っていて、久しぶりの再会に話が弾み、満州の様子などを興味深く聞いた。長兄からは、満蒙開拓青少年義勇軍に志願することを強く勧められた。仕上げ工にも多少の未練があったが、それよりも兄たち三人がいる満州の方に思いが強く、志願することを決意した。

その年の十二月に、茨城県の内原訓練所に入所した。中途入所だったので平均年齢十八歳と高く、出身県も全国からで、経てきた職業も多種多様だったが、それが後日には大いに役立つことになった。

内原訓練所では満蒙開拓に必要な知識・技能などを学び、体力の向上を図るため鍛えられて、開

拓精神をたたき込まれた。基礎訓練が終わった翌年の三月に隊員三百六十三人は、小野中隊長の統率のもとに、希望に燃えながら勇躍新天地に向かって壮途についた。途中、東京で宮城遥拝、伊勢での皇大神宮参拝、名所旧跡などの見学をして、舞鶴港に着いた。

そこから連絡船で朝鮮に向かったが、このときの日本海は特に荒れて、船酔い続出で満足な者は五十人ほどで、その者たちがみんなの面倒をよくみてくれた。ようやく清津港に着き上陸したが、足が地に着かず宙を飛んでいる感じだった。そして一路、北安省鉄麗訓練所に向かったが、車窓から白一色の大雪原の彼方に沈む真っ赤な太陽を見て、満州に来たことを実感した。

二月九日、訓練所の所在する鉄山包駅に到着し、雪を踏みしめながら中隊に向かったが、訓練所の関係者が受入れ準備を整えて暖かく迎えてくれた。訓練所での編成で、私は第三大隊第七中隊所属となったが、間もなくして義勇軍から義勇隊に呼

称が変わり、第七中隊も小野中隊となった。第三大隊は片桐、村木、小野、滝口という四箇中隊編成となり、ここで三年間、開拓団入植に必要な多種多様な教育訓練を受けることとなった。

二 照国開拓団に入植

肥沃な原野が広漠と続く中、人手による開墾、次いで家畜を使つての作業、トラクターなどの農耕機械力による開拓により立派な農地が誕生して、見事な収穫を得た。これに力を得た団員は、夏期は農作業に専念し、冬期は軍事訓練に加えて各種の教学・職業訓練に励み、三年間の訓練は瞬く間に過ぎ去った。

昭和十七年八月に、我々の小野中隊は、黒河省遼克県哈拉氣口子の開拓地に入植することが決まった。ここは満ソ国境の近くだが、当時は国防的見地から、義勇隊開拓団はほとんどが国境近くの開拓地に入植させられた。九月になると、小野中隊長の現地視察が始まり、同時に設営班及び先遣隊の人選が行われ、中隊内は慌ただしくなった。

十八年の正月には、総本部の弥栄神社に開拓団移行の報告参拝を行い、二月中旬には設営班などの先遣隊の氏名発表があつて、三月二日に小野中隊長以下十一人の設営班が出発した。続いて盛大な見送りを受けながら、五十人の先遣隊も希望に胸をふくらませて現地に向かった。行く者も見送る者も、万感こもごもであつた。

南方における戦局のひつ迫に伴つて、開拓団移行と同時に徴兵適齢者が次々と入営し、さらに病気などで退団帰国する者や、一般企業などに転職したりする者が七十人ぐらいいて、本隊残留者は百五十人余りとなつていた。

昭和十八年八月、三年間の訓練を受けた鉄麗訓練所を去ることとなり、万感の思いを胸に後輩隊員の見送りを受けて、新しい開拓地に出発した。

哈拉氣口子の開拓地に入植した小野中隊長は、照国開拓団と呼称することになった。ここに我々の開拓団、照国開拓団が誕生した。

団に着いた私たち本隊は、先遣隊の苦勞に感謝

私も五月に現役召集を受けて、後ろ髪を引かれつつ照国開拓団をあとにして、吉林の五〇二部隊に入隊した。この部隊は、対ソ戦を想定して編成されたゲリラ戦用の部隊で、七月には一期の教育途中で東満地区の老黒山に入り、陣地構築に任じたが、陣地構築も半ばの八月九日にソ連軍が侵攻してきて、山林を利用したゲリラ戦が始まつた。侵攻して来るソ連軍戦車にたびたび夜襲をして、戦果を挙げた。一期の検閲も終了して、いよいよ、特別進級で一等兵になった。

入ってくる情報は関東軍の敗報だけで、既に戦力の大半は日本本土防衛に回され、補充されたのは根こそぎ動員の未教育兵が多く、精強関東軍の戦力はなくなつていたようだ。国境方面から下がつてきた兵隊から聞いた話では、命令指揮系統の混乱がひどいとのことだった。中隊でも本隊との連絡が途絶えがちだったが、偵察行動は続けていた。ゲリラ部隊の特性から、ソ連軍に対してはむしろろんだが友軍にも行動を秘匿しなければなら

しながら再会を喜び合い、これから力を合わせて希望に燃える新しい村造りに邁進することを誓つた。団は本部部落、第一部落、第二部落という三部落構成で、開拓に励んだ結果、見事な農地となり豊かな収穫が始まつた。

だが、入隊時の事情から徴兵適齢者が多い団員には、次々と召集令状がきて、十九年の正月には実在する団員は百余人となつていた。

その反面、家族招致の話が出るようになり、森永さんが六月に花嫁第一号を迎え、団内は明るくなつてきた。だが、八月には団結の中心であつた小野団長が、召集を受けて団を去つて行つた。建設上の照国開拓団としては大変な痛手であつたが、それにも増して小野団長の心境を察するに、後ろ髪を引かれる思いで出発されたことだろう。

二十年三月には、家族招致も十世帯になつた。召集は相変わらずで、人手不足の問題が一段と深刻になつてきた。

三 召集を受け入隊

いので、非常に制約があつた。しかし、その反面にはいろいろな状況を見聞することもできた。国境周辺では、一般邦人や開拓団の人たちに悲劇が起きていることも話が伝わつてきた。

九月になつて将校斥候の報告で、関東軍敗北の様相が分かりかけてきた。既に八月十五日終戦となり、そして間もなく武装解除された部隊が、捕虜収容所に入ったのを目撃してきたらしい。何とも信じられない事態だが、事実のようだった。そのうちに本隊から連絡があり、内地に新型爆弾が投下され、停戦協定が成立したという内容だったが、一説には無条件降伏だというような話もあり、様々なうわさが飛び交つた。どの話が真実か分からぬうちに武装解除の話が出たが、停戦協定なのに武装解除など有り得ない。それは何かの謀略だとの話も飛び交つて、みんなは動揺した。召集兵は解除になるが、現役兵は内地に帰還後兵役続行するか、うわさはうわさと呼んでいた。現役部隊後、再度召集を受け中国を転戦後に、満州の部

隊に転属となった朝日兵長が無条件降伏のことを知り、号泣していた姿が今でも脳裏に焼きついている。家族を故郷に残して、何のための戦だったのかと言って泣いていたが、その空しい心情はよく理解された。朝日兵長からは、戦場における心構えを厳しく教えられたし、これから起きるであろうことについても、いろいろと指導された。その一つに、まず塩を持つことを言われたので、携帯燃料の空き缶に塩を詰めて持っていたが、それが後に大変に役立つことになった。

いろいろな出来事を見聞きしているうちに、一般邦人として満州にいる兄たちのことや、照国開拓団の様子が気になってきた。開拓団出身の者の中には、武装解除されるくらいなら武器を持って脱走し、開拓団に戻ろうという話もあって、混乱するばかりだった。脱走に必要な地図、火起こし用のレンズなどを探し歩く者を見掛けるようになり、そのうちに二人が脱走した。

四 捕虜として収容所へ

つたが、兄たちや照国開拓団の人たちを思い出した。輜重兵大隊の全滅した場所を通つたが、死体が散乱し悪臭が漂い凄惨そのもので、遺体は狼に喰いちぎられ見るも無惨で、鬼気迫るとはこのことかと思つた。ソ連兵も気持ち悪いのか、早く行くと銃で脅しせき立てていた。

三日ぐらい露営しながら、ソ連領内のシベリア鉄道のある駅に着いた。説明によれば、ウラジオストックは引揚者で満員なので、間宮海峡のソフガワニ港から帰国すること、その駅から有蓋貨車に各中隊十人ぐらいずつ集め、五十人単位で貨車に乗せた。同じ中隊だどのような相談をするか分からず、それを恐れたソ連軍のやり方だった。貨車には野砲や戦車が積み込まれ、一緒に日本に持ち帰ると話していたが、これは全くの偽装工作だった。貨車の中での話題は、現役兵の再復帰話や、故郷の自慢話や食べ物話など、話題はつきなかつた。四、五日後にハバロスク近郊のサルアツカに着き、第二十五収容所に入った。日

やがて武装解除の命令があつたが、停戦協定と言っているのに武装解除とは、と納得ができなかつた。将校には帯刀を認め武士道的扱いだと言っていたが、これはソ連軍一流の謀略だった。武装解除後に捕虜収容所に入れられると、早速ソ連兵の略奪に遭つた。時計、万年筆、皮ベルトなどめぼしい物は残らず取り上げられ、ソ連兵の程度の悪さに驚くばかりだった。それが入れ代わり立ち代わりで、敗戦の様相が分かつてきた。

九月末になって収容所を出発。帰国の途につくとのことで、行軍を開始し国境方面に向かつた。説明では、ウラジオストックに向かい、そこから船で帰国することだった。ソ連兵に監視され、列をなして歩く日本兵の姿を邦人や満人がどんな風に見たか、想像に余りあることだった。現地人が、玉蜀黍トウモロコシを焼いたのや饅頭を売りつける姿には驚くばかりで、お金は平常通り流通しているようだった。途中で開拓団や一般邦人の避難行の様子を見て、あまりにも悲惨な状況で見るに忍びな

本から迎えるの船が来るまで、ここで働いてもらうとのことだった。

一カ月後、同じ地区の第七収容所に移る。ここは、収容所の管理者の中に囚人だった者がいて、程度の悪い収容所として有名だった。だんだんと、ソ連軍に騙されたことに気付き始める。まず、将校の軍刀が取り上げられた。帰国の話はいつの間にか消えていった。ここで鉄道工事の仕上げと、周辺の石垣工事をさせられた。給与は中間搾取がひどく、食事は黒パン三〇〇グラムと、高粱に米か玉蜀黍の混じつたお粥だった。たちまち栄養失調者が続出し、鳥目になる者も出た。私も夕方から夜間にかけて目が見えなくなり、便所に行くのに大変な思いをした。

そんな状態の私が助かつたのは、三カ月に一度ぐらい診察に来るソ連軍医のお陰であつた。診察は、真っ裸にして肉付を見て、一級から四級に区別するだけだった。一・二級は一般的労働適、三級は所内または軽作業適、四級には休養が与えら

れた。これで多くの者、特に初年兵は助かったが、この診察がなかったらさらに多くの犠牲者が出たことと思う。作業に出れば食べ物の話ばかりで、話した後は空しさが残るだけだった。

栄養不良の身には、冬將軍の襲来で寒さが余計身にしみてきた。療養所に送られる者が次々と出て人数が減ってきて、班内には二、三人しか残らなかつた。ほかの収容所から回されて来る者もいたが、話に聞くと、第七収容所と告げられると「第七収容所だけは勘弁してくれ」と、土下座をして泣く者もいたとのことだ。

軍律を維持する意味から、特定の者を上等兵や下士官に進級させていた。昭和二十一年の正月を迎えたが、楽しいことは無く、今年も帰れるだろうかというはかない望みだけを持っていたが、体力の消耗は一層烈しくなつた。

三月を過ぎると待ち遠しい春がようやくやってきましたが、飢餓地獄は相変わらずで、雪解けた下水の中に野菜屑などを見付けると、先を争つての取り合い

つたより軽かつた。日本軍の軍医や衛生兵が治療を担当し、病室では回復の近い者が世話係をしていて面倒をみてもらった。薬などは乏しく、傷口には塩水を塗るだけだったが、私は元々傷負けをしない体質だったので、回復は早かつた。食事は、三度共雑穀のお粥が少量と黒パンが五〇〇グラムで、煙草、砂糖の配給もあつたので、厳寒の中の伐採ノルマに追われることを思えば、天と地の差があつた。

ある日、重傷患者が入ってきたが、森林鉄道の機関車に太ももから両足を轢かれたとのこと、軍医の話ではこの病院の手当では助かる見込みは無いとのこと、痛みがひどいらしくて呻き苦しんでいた。間もなく静かになると、突然何か話したのでなんとなしに聞いてみると、東北弁だつた。「おど（父）、あば（母）今帰つたぞ！じじ（祖父）、ばば（祖母）は元気か？武、秀、正はどうしているか！」多分、両親たち家族を呼んでいるのだと思つた。それからひと通り親類など

となり醜い有様となつた。そのころ移動で二十人ぐらい入ってきたが、収容所のひどさを見て驚いていた。その中に、六十歳ぐらいの高齢者がいたので、不思議に思つて事情を聞くと、満州で兵隊狩りに遭つてここまで来たとのことだつた。

四月も過ぎ五月になると、野山では山菜が採れるようになり、作業の合間に採つては食べた。だが、毒草とは知らずに食べ、急死するという悲しいこともあつた。

夏ごろから給与も少し改善され、量は少ないが砂糖、煙草の配給もあり、幾分体力も回復してきつた。十月末に第十収容所に移され伐採作業に従事したが、また厳しい冬を迎えると思つたと気が沈んだ。だが帰国の話も出始めて、必ずしも絶望的ではなかつた。

昭和二十二年を迎えて間もなく、伐採作業中に切り倒された木の下敷きになって足をけがした。すぐに入院したが、その病院は規模の大きい病院だつたので、一時はどうなるかと心配したが、思

の名を呼び「……ああ腹減つた、何でもええから白い飯とおづけつこ（味噌汁）とがっこ（漬物）で飯くわしてくれ！」と言ひ、「ああうまがつた」と言つた途端にしゃべらなくなつた。そのとき息を引き取つた。死ぬ間際に魂は故郷に帰ると言われるが、まさにそのことを目のあたりにした。何とも辛くて悲しい出来事だつた。

三月早々に退院し療養収容所に移つたが、五百人ぐらいが収容されていて、一部の人は軽作業に出ていた。食事も雑穀だが固めの飯だつた。第七収容所のことを思えば、大きな差があつた。ソ連側でも、一応は病院、療養収容所には特別な配慮をしていたようだ。パン工場の使役に行った者が、屑パンをもらつてきて皆に配つていた。療養収容所での生活が続く、体も七、八分通り回復したが、ほとんど仕事らしい仕事はなく、ときたま軽作業に出る程度だつたが、作業隊のことを思えば同じ収容所生活でも随分と差があるものだつた。

四月末、収容所近くにチリムシャ（日本名でア

イヌねぎのことで味、香り共ニンニクと同じ)の群生地があるとのことで、その採取員となり、第七收容所で小隊長だった松本曹長に指揮されて行った。チリムシヤは面白いように採取でき、その日のうちに集めて翌朝のバザール(市場)で売ることとなった。ソ連人の家庭では薬味として珍重され、スープなどに入れて食べるということだった。半月ほど採取員として働き、再び療養收容所に帰った。收容所では帰国の話で持ち切りだった。

五 帰国のためナホトカに向かう

帰国が決まり、軍服のズボンと中国服の上着が支給されたが、両方共新品だった。約千人が一個集団となり、有蓋貨車に四十人ぐらいが乗り余裕のある移動で、一路ナホトカに向かった。途中でたびたび停車したが、そのたびに捕虜として鉄道工事に従事している日本兵に、お先に帰国すると言おうと、列車に駆け寄って来て涙を流しながら羨ましがられた。列車内では、一部の者から共産主義や、計画経済の賛美などの洗脳話を聞かされた

活では、ソ連の一般市民生活などは知る由もなかったが、ここではバザールを見ることもできた。市民生活には大きな格差があるということも、初めて知った。

ここでひと冬を越して、四月中旬いよいよ帰国船に乗る順番がきて、客車でナホトカに行ったが、ナホトカでもすぐに乗船することはなく、待機させられた。毎日、赤旗やインターナショナルの歌を唄ったり、共産主義の教育を受けたが、わけの分からぬまま分かったふりをしていった。休憩時には、気心の知れた仲間と裏山に登って、共産主義のこきおろしをして憂さを晴らしていた。

五月一日のメーデーは初めての経験だったが、盛大で運動会もあって賑やかだった。その日ソ連側の宣伝で、日本では失業者があふれ、食べ物も無く餓死者が続出していて、ひどい状態だという話を聞かされた。その話を聞くと、帰国の嬉しさと共に一抹の不安も湧いてきた。間もなく引揚船「明優丸」が、日の丸の旗をなびかせて入港して

が、大部分の者は関心を示さなかった。帰国が現実味を帯びてきたので、思想話などに興味を持たなくなっていた。

六 再び労働に従事する

列車は四、五日してナホトカ港に着いたが、港はけが人や病人でいっぱいだった。下車することもできずに、三日ほど列車内に閉じ込められた。帰国の優先順位はけが人・病人が先で、健康な者は後となり、順番がくるまで働いてもらうということだった。私は、ナホトカから五十キロメートルぐらい離れているスパークスという街のセメント工場に、約四百人のグループに入って行ったが、そこでは人手不足ということもあって歓迎された。收容所の設備も良く電灯がついていて、今まで体験した收容所のことを思えば、食事も格段の差があった。警備兵もなく十人単位で工場に出勤し、帰りには作業成績表をもらった。工場には、日本のモーターや大型機械が作動していて、何となく誇らしさをおぼえた。今までの僻地での收容所生

きた。日の丸の旗を見て、懐かしさで涙があふれた。

七 帰国

帰国船に掲げられている「帰国の無事平穩を祈る」との大きな垂れ幕を見ていると、いろいろな感慨が頭を駆け巡った。残った抑留者のこと、望郷の念叶わず異郷に散った友のことなどを思い、感無量だった。乗船は一人ずつ棧橋を渡り、デッキにはソ連側、日本側共二、三人の係官が立っていて、名前を呼び確認の上乗船した。前歴が憲兵、特務機関員、警察官、満州国官吏だった人は、乗船間際で呼び戻された。私たちのグループに警察官が二人いたが、一人はみんなで庇い合って無事乗船したが、もう一人は戻された。その人の悲しそうな顔は、見るに忍びなかった。聞いたところによると、乗船を止められた人は、再度調査の上強制收容所送りになるとのことだった。

乗船後、船長から日本国内の事情、船内での心得、そして今後の予定などについて話があった。船

室の青畳に、久しぶりに手足を伸ばして横になった。食事は、白いご飯に味噌汁が出た。祖国日本の味をしみじみと味わった。海も全く穏やかで、滑るように走っていた。今までのことは、夢の中のことのような気持ちになっていた。

翌日、甲板で何か騒ぎが起きたので見に行くと、同じく乗船した将校の二団だった。二人の将校を吊上げて、今にも海に投げ込む様子だった。そこに船長が飛んできて止めに入り、「ここは日本国内で船長に警察権がある。どのような事情か分からないが、上陸したらしかるべき手続きを取り処置する」と言って説得した。話を聞くと、将校団がソ連側から取り調べられた際、一部の将校がほかの将校の過去の行動を漏らしたことから、戦犯として処刑されたことが因となり、そのような将校を帰国させることはできない、日本海に投げ込んでやるということからの騒ぎであった。しばらくすると、また騒がしくなったので見に行ったら、今度はこの将校が日の丸の旗の前に土下座を

郷里に向かう駅頭で、婦人会の接待を受けて涙が止めどもなく流れた。同郷に向かう者四人で相談し、日中帰るのは何とも気が引けるので夜行列車に乗った。車中で、学徒援護会の親身な世話に感謝感激した。

原町駅に着いたのは、夜十一時ごろだった。三番目の兄が果たして健在で役場に勤めているか分からないが、消息を聞こうと役場に行ったら、宿直の人は元気に勤務していると言った。

八 兄との再会

宿直の人に兄の家を教えてもらい、訪ねて行った。真夜中のことで驚いていた。舞鶴上陸のことは新聞紙上で分かっていたので、いざれ連絡があるだろうと待っていたが、まさか夜中に来るとは思ってもみなかった、と喜んでくれた。先に帰国した兄たちの話では、東満方面の部隊は玉砕した部隊が多く、秀雄も多分戦死したのではないかと言っていたそうだ。兄嫁とも子供のころから姉弟同様にして育ったので、心底から喜んでくれた。

させられ、何か書類に署名させられていた。その書類は、処刑された将校の遺族の家に謝罪に回るとの誓約書であった。

翌日、甲板上で歓声が聞こえるので出て見ると、遙かに緑の山々が見えていた。「国敗れて山河あり」の通り、十八歳の春に満州に渡り、それから約七年敗残の姿で今祖国に帰って来たのだった。嬉しさと共に過ぎ去ったこと、心に懸かっていた兄たちのこと、そして照国開拓団のこと、郷里に残っている兄のことなどが次から次と脳裏を駆け巡った。

陸地に近づくくと、日本の係官やアメリカ兵が乗り込んできた。アメリカ兵の洗練された服装や態度は、ソ連兵とは比較にならなかった。間もなく上陸し、いろいろと手続きがあり、国内事情などの現況が説明され、被服の交換や未払給料の支給があった。給料として八百円を受け取ったが、その額に一時はびつくりした。やがて貨幣価値の違いという説明があり、やっと納得した。

その夜は、明けるまで話し合い尽きることがなかった。

国内では、大都会はもとより地方の小都市まで空襲があり、焼け野原になったそうだった。この原町も飛行場があったので、艦砲射撃を受けて避難したとのことだった。また、食糧難もひどく、衣類や家具などはほとんど食べ物と交換したそうだった。

長兄は、奉天から昭和二十一年十一月に家族三人で引き揚げて、県庁に復職していた。次兄のところは、兄嫁がチチハルから避難して途中で三人の幼児を亡くし、二十一年十二月、一人で引き揚げてきた。次兄もシベリアから二十二年六月に帰国し、秋田市で進駐軍に勤めていた。四兄は二十一年五月に結婚し、間もなく終戦となり、戦後の混乱から新妻は結核になり、二十一年四月に亡くなった。一人で二十二年の九月に撫順より引き揚げ、北海道の炭鉱に勤めているとのことで、五人の兄弟は無事であることを知り、安心した。

翌日、まずは叔父のところへ帰国の挨拶に行っ

たが、開口一番「共産党員になってきたのではないか？もし共産党に入っていたなら、玄關の敷居をまたがすわけにはいかん」と言われ、度肝を抜かれた。相変わらず共産党嫌いの頑固おやじだと思つた。シベリア帰り、即共産党員と思ひ込んでいるようだった。そんなことはないと言つたら、「長い間ご苦労でした」と、初めていたわりの言葉を掛けてくれた。

九 照国開拓団の追跡

帰国の手続きや挨拶、そして旧友訪問などで一週間はすぐに過ぎてしまった。日がたつにつれて身心共に落ち着きを取り戻しつつあったが、それと同時に照国開拓団のことが、頭から離れなくなつてきた。そのころは未だ照国開拓団のことについては、うわさにも耳に入つてこなかった。

私は、生きて帰れなかったことに対しての償いとして照国開拓団について追跡することを決心した。先づその手始めとして終戦後の満州、特に開拓団の人々がどうであつたかを知りたくなり、再

人の集団だつたと言う。避難行途中でたびたびの略奪暴行に遭遇し、ほとんど着のみ着のままとなり、ようやく奉天（瀋陽）にたどり着いた。奉天の日本人会では救済に尽力し、空き家になつた学校や集会所を利用して収容所を各所に設けたが、次々と避難して来るために、収容所はたちまちのうちには満杯になつてしまつた。

食糧品の配給はわずかながらあつたが、足りない分は自前で求めるしかなかった。売る物もなく働くこともできない人は、餓死させるよりはと中国人に頼んだり、食べ物と交換したりして子供を売つていたが、その行為をだれも責めることはできない。さらに、収容所では虱が蔓延して、発疹チフスや赤痢などの伝染病がはやり、多数の人、特に乳幼児が多く亡くなつて、まさに地獄絵図を見た思ひだつたと語つていた。

長兄が、二歳の幼児を連れて親子三人で引き揚げて来れたのは、最終勤務地が奉天だつたことが幸運だつたのだ。

度、長兄を訪ねることとした。

やつと長兄に会えて、終戦後の満州の状況を聞いた。「長兄は満州拓殖公社奉天事務所員として勤務し、開拓団関係の仕事をしてきた者にとつて、開拓団の惨状は見るに忍びないことだつた」と言つた。長兄も終戦直前に召集されたが、終戦と共に解除になつて奉天に戻つていた。間もなく国境地区からの避難民が南下してきて、あとを追うごとくソ連軍が奉天に入つて来た。通信は途絶し預貯金も引き出せなくなり、ソ連兵による略奪暴行が始まつた。街を歩くと時計、万年筆などめぼしい物は取り上げられ、そのうちに家の中に入り、手当たり次第に物を持って行く。物の次は婦女暴行が始まり、婦女は髪を切り顔に煤を塗つて男の格好をしていたが、それでも多くの婦女が凌辱され犠牲になつた。最も惨めなのは、辺地から避難して来た開拓団の人々だつた。軍や警察は家族共々早いうちに撤退し、頼りとする男子を召集で取られ何の連絡もなく取り残された女、子供、老

間もなくして秋田の次兄より便りがあり、秋田に來ないかとの話だつた。原町での就職は難しいようなので、秋田に行くことにした。秋田に着いて、久しぶりに次兄夫婦といろいろなことを話した。次兄とはシベリア抑留のこと、兄嫁からはチチハルでの終戦前後のことを聞いたが、みんないろいろな苦労をしてきたことを知つた。次兄は軍属だつたが、抑留生活ではすべて軍人と同じに扱われ、クラスノヤルスクで鉄道工事をさせられたが、早くに民生化されて、待遇はほかと比べると幾分良かったようだった。昭和二十二年六月に復員し郷里に立ち寄つたが、嫁の実家の小坂に行つて、秋田市の進駐軍に就職した。兄嫁の話は、聞くに耐えない苦労話だつた。昭和二十年七月には、在チチハル地区の戦闘部隊はほとんど新京（長春）、奉天方面に移動し、後方支援の非戦闘部隊しか残つていなかった。このため、ソ連軍の侵攻が始まるや、避難列車では軍の幹部が自分の家族を乗せるために、開拓団の人や一般邦人を喧嘩腰で降ろ

すという騒動があつて、このことは後々まで避難の的になったことだった。残された軍属の家族や一般邦人は、小学校に集められてそのままこそが難民収容所になった。ソ連軍の侵攻は早く、チチハルに入つて来るやすぐに略奪暴行の限りを尽くしたが、それには一部の満人も加わっていた。

兄嫁は五歳の長男、三歳の長女、そして一歳の赤子を連れての避難で、荷物や食糧までとはとてもではなく手が回らず、それこそ言葉通りの着のみ着のままだったとのこと。その後、子供は飢えと病気で次々と死んでしまい、自分で穴を掘り埋葬したそう。次兄が帰つてきて一番先に出た言葉は、子供のことだったとのこと。「三人は無理でも、せめて長男だけでも連れて来れなかつたか」と言ったが、当時の状況を説明したら渋々納得したとのことだった。チチハル及びその近辺の悲惨さは、言語に絶した有様であつたようで、奥地から避難してきた開拓団の人を見たが、女、子供だけで持ち物はすべて略奪され、裸同然の姿でふらふらと

備の撤去で生産はがた落ちし、満鉄関係者の立場も逆転。中国人に使われる身となった。それでも技術的な面で日本人を必要としたので、ほかよりは優遇された。ソ連兵も、撤収にきた中国人も大した変わりはなく、手当たり次第の略奪暴行だった。

兄は、炭鉱で働きながら炊事洗濯に妻の看病と、休む間もない生活だった。ソ連兵は家にも押しつけてきたが、病人が結核と知ると何もせず立ち去った。ソ連では、結核を忌み嫌っていた。医者診察も受けられず、薬もないので症状は悪化するばかりで、二十一年四月にとうとう亡くなつてしまった。当時の状況では、そのままの姿で埋葬するしかなかったが、兄は何としても遺骨を持ち帰りたいと決心し、満鉄関係者に頼み込んで協力をしてもらい、どうにか火葬をすることができて持ち帰った。二十二年九月に引き揚げてきたが、妻の看病中に結核に感染し、引き揚げたときには相当進行していたようだった。妻の実家に報告に

歩くのがやつとという様子で、よくここまでたどり着いたものだ、思わず目をそむけたそう。

いろいろと話には尽きなかったが、それ以後の満州の話や子供の話は禁句となった。間もなく、次兄の世話で私は進駐軍の管轄係として就職することとなり、取りあえず生活のめどはついたが、生活は厳しかった。主食は配給制だったが、秋田米の本場だけあって米は自由に買うことができたので、体力の回復は早かった。

その年の十一月に、北海道の四兄より便りがあり、体を悪くしたので迎えに来てほしいとのこと。早速次兄が迎えに行つた。会つて見て、あまりの衰弱に吃驚した。終戦当時の話を聞くと、昭和二十年五月に結婚したが、七月ごろになると妻が結核になり、満鉄病院に入院した。八月、ソ連軍は撫順にも侵攻して、すぐに炭鉱関係の設備をはじめあらゆる施設の撤収を始め、病院も同じで医療器具、薬品など根こそぎ持ち出され、その上入院患者は追い出された。石炭の採掘は続けたが、設

行つたが、敗戦による満州の混乱の状況を知らない実家では、「なぜ！ 自分だけ帰ってきたのか」など散々に愚痴をこぼされたようだ。

撫順時代の上司から、北海道の炭鉱で働かないかと言われて就職したが、人並みに働くことではできずに二十三年三月、遂に倒れた。

次兄がすぐに診察を受けさせたところ、医師は「重症の結核で長くて一カ月の命」と言った。本人には告げずに、兄弟にのみ連絡して励ました。遂に亡くなった。引き揚げてから身内の問題だけでもいろいろあつたが、日が経つにつれて照国開拓団のことが気懸かりになつてきた。

十 照国開拓団の惨状

連絡のとれていた会津の鈴木さんに便りを出したところ、折り返し返事があり、お互いの無事と元気であることを喜び合った。私は、進駐軍勤務を止めて建築会社に就職したが、生活がある程度安定してくると、小野中隊や照国開拓団のことを調べたくなった。絡んだ糸を一本一本解きほぐす

ようにして消息を調べ、連絡が取れてきた。昭和四十七年十一月、第一回の集まりを熱海で開催し、感動の再会を果たした。

小野中隊長をはじめ、二十六人が満州の広野に散華され、その友に思いを致しながら、生きて再び会えた喜びを共にした。

照国開拓団と最後まで行動を共にした、新潟県出身で第二部落所属の青柳千代さんから、照国開拓団終戦前後の状況をつぶさに聞くことができた。この事実は小野中隊長、照国開拓団員の全員が知りたいことであり、また知らせるべきことでもあると思った。

私が現役召集となつて、照国開拓団を後ろ髪を引かれる思いで去つてからほどなくして、照国開拓団の男性は次々と召集されて、終戦のころは総員三十五人となつた。私と同様に、みんな後ろ髪を引かれる思いであつたろうし、残つた者は必死で照国開拓団を守ろうと覚悟をしたとのこと。第二部落は黒龍江まで約二十キロメートルで、対岸

その他の在留邦人十五人に、大公河、大黒河、大栄、三州の義勇隊開拓団が加わり辰清を指したが、小興安嶺越えの悲惨な避難行となつた。矢田さんの必死の努力にも関わらず、青森、尾上、五戸の一般開拓団、北鎮、大日紀の義勇隊開拓団とは連絡がとれずに、置き去りになつたことは悔やんでも悔やみきれないこととなつたそうだ。

ここを死守するという覚悟を固めていた照国開拓団では、十日の夜半に、サガミ山陣地からの斥候隊に遼河方面への道案内を頼まれて三人が同行したが、そのころ既に遼河は爆撃で火の海と化して、ソ連軍の侵攻が間近に迫つてきたことを知つた。斥候隊の強い勧告によつて、照国開拓団も撤退することに決心を変更した。一旦、それぞれ各部落に戻つて家を整理焼却し、家畜は放牧し、食糧と身の回りの物を持って再度本部に集合した。

照国神社の御神体は捧持し、神社は焼却した。荷馬車隊を編成して、積めるだけの物を積み孫呉に向かった。

はソ連領であつた。八月九日の朝、突如として砲声が開こえてきて、不審に思いながら、まさかソ連軍が攻めて来るなどは夢にも思わず、部落員総出で麦刈りをしていたら、団本部から連絡が入り「ソ連軍が侵攻したので、至急本部に集合するように」という内容で、午後一時ごろに全員団本部に集合した。畑指導員ほか十三世帯二十一人、独身者十三人は、本部の指示で各自の分担を決めて、三十八式歩兵銃で武装し、要所要所に歩哨を立てて警備態勢を敷いた。夜の八時ごろに、満拓の矢田さんが撤退の勧告に来た。頼みとする国境警備隊や警察隊は、既に撤退したらしい。矢田さんは、各開拓団を回つて撤退勧告をしているとのことだった。畑指導員は、それを受けて部落民に撤退を相談したが、全員この地を死守する覚悟だと言つた。その意志は固く、矢田さんが夜を徹して説得しても聞き入れなかつた。矢田さんは、やむなく翌朝、大公河開拓団に向かつたとのことだった。大公河では県公署、合作社、満拓の家族、

昭和十八年三月に先遣隊入植以来、血と汗を流した照国開拓団の地を去るに、みんなの心境は万感胸に迫る思いであつたろう。途中、サガミ山陣地に到着し婦女子は避難したが、男性は部落と共に戦闘に参加することを申し出たが、部隊長から避難するように言われた。再度強く申し出て、独自の斎藤、宇野ら十三人は参加を許された。サガミ山陣地での攻防は有数な激戦地となり、照国開拓団の参加者のうち七人がここで戦死した。婦女子たち二十二人は、無事に孫呉に入った。ここで、鉄麗訓練所の佐藤先生一家と合流したが、佐藤先生は満拓に連絡に行くと言つて出たまま消息不明となつた。出発に際して、奥さんに拳銃を渡し「もし最後の時がきたら、この拳銃で自決するように」と言われたとのことだ。照国一行は二十六人となり、孫呉から避難列車に乗りうとしたが、軍関係者やその家族が優先とされて、開拓団関係者や一般邦人は取り残された。次の列車を待ったが、いつ出発するのか見込みがなく、やむなくほかの一

般邦人と共に北安に向かって南下することになった。身重な人や病人、子供は馬車に乗せ、その他の人は歩いたが、雨の日が多く悪路に苦勞しながらの避難行となる。照国の男子は、集団の先になつたり後になつたりして、みんなを励ましながら頑張つた。

二十日を過ぎたころから、二、三人ずつ組んで撤退する兵隊と会うが、口々に「日本は負けた！」などと言うので不審に思っていたが、やがてその真相が分かり、「神州不滅」「無敵関東軍」と信じていたことが夢のごとくに崩れてきて、失望に打ちのめされた。

間もなく暴民の襲撃が始まり、最初のころは携行していた小銃のおかげで防いでいたが、すぐに弾がなくなり暴民に襲われ始め、荷馬車もろとも奪われるようになった。畑指導員と赤坂さんの奥さんが赤痢にかかり、畑指導員は間もなく亡くなり、赤坂夫人も回復せず、片庭さんの奥さんは身重で、遂に一団について行くことができずに、二

団も青柳、絹田、岡野、高島、多田、森永、土橋など女性十一人と佐藤先生の子供二人の、計十三人となってしまった。まさに生地獄の状態だったが、十月初めに新京行きの列車に乗ることができた。しかし無蓋貨車なので、要所に杭を立てロープで囲み、女、子供を中心にして男子がその周りに座つたが、それでも列車が停まるたびにソ連兵や暴民が襲つてきた。

新京に到着して、日本人会の世話で空き家になつた民家に収容され、六畳一間に照国開拓団十三人が入った。雨露をしのげるだけでも有り難かつた。満拓関係者よりは少なかつたがお金をもらったので、迫つてきた冬に備えてまず衣料を求めた。わずかだが高粱と玉蜀黍が配給されたが、到底足りないなので、食べ物を入力するため働きに出た。幸いに治安が良くなり、みんな働いた。佐藤先生の長女光子さんは元気な子で、男の子の服装をして留守を守ってくれた。みんなで働いたので食糧も確保できて、みんなの健康も回復してきたが、

人は途中ではぐれてしまった。二十三人になつた照国開拓団は、やつとのことで北安に着いたが、途中での数度の略奪暴行によって、着のみのままの惨めな姿になっていた。

北安では満拓関係者が世話してくれて、難民収容所に収容された。佐藤先生の子供が身につけていた貴重品だけは略奪を免れ、当座の費用として役立ったが、身重の奥さんの衰弱はひどく、そのうちに子供のことを頼みながら亡くなった。

北安にもソ連兵が入つて来て、略奪暴行が激しくなり、なげなしの物まで根こそぎ持つて行つた。男子八人がソ連兵に連行されて戻つてこなかつたが、うわさによるとシベリアに抑留されたらしい。食べ物を手に入れるために、留守番を残してみんな働きに出て、商店の手伝い、行商、畑仕事など何でもやつて一日の食糧を求め、みんなで分け合つて食べていた。収容所では発疹チフスや疫病もはやり、栄養不良と重なつて子供が次々と亡くなった。佐藤先生の次女も亡くなった。照国開拓

国境周辺から避難してきた人々の姿を見ると放つておくこともできず、手持ちの衣料、食糧を分けて大層感謝された。

昭和二十一年七月になると、日本への引揚げの話が出て、開拓団関係者が優先されるとのうわさで持ちきりとなつた。

いよいよ引揚げが具体的にになり、新京から無蓋貨車で南下し錦県に行き、引揚船が来るのを待つた。葫蘆島コクトウから博多港に向かつた。博多でそれぞれ故郷に向かう人たちと涙で別れた。苦難の避難行だったが、再会を誓い合つた。避難行の途中ではぐれた人や亡くなった人のことを思うと、胸が痛んだ。

ここに、私の記録をまとめたが、生き残つた者の残された務めとして、永遠の平和を願いつつ書いた。